



映画『ぼに 迎え火』 完成披露上映会

11月9日(土)

午後2時～(開場：午後1時30分)

会場：3階 多目的ホール 入場無料

上映作品：『ぼに 迎え火』(75分/監督・細川正樹)



—彼の世から、ただいま。
—この世に、おかえり。—



映画『ぼに 迎え火』より

■夏、お盆の季節を迎える徳島。母親は帰郷した娘を暖かく迎え、娘は阿波踊りの連の仲間との練習に精を出す。そして現世に戻り来る死者たちのために迎火が焚かれる頃、父親もまた、娘に会いに何処からか帰って来る…。(あらすじ) ■2018年夏、阿波踊りに沸く徳島市内をはじめ、北島町や藍住町などオール徳島ロケで撮影された映画『ぼに 迎え火』の上映会です。■オープニング・アクトとして、北島町在住の書道家・日野出 夏穂(ひので かすい)を招いてのライブ書道パフォーマンスを行います。出演者・監督による舞台挨拶あり。

徳島クリエイターズマーケットvol. 32

12月7日(土)・8日(日)

午前10時～午後5時(8日は午後4時まで)

会場：2階 ギャラリースペース 入場無料

主催：徳島クリエイターズマーケット事務局

(川久保 ☎080-3162-2234)

■全国津々浦々から凄腕の「モノづくり人」が集う、徳島県内最大級のハンドメイドマーケット、今回も北島町で開催します！■発起人は川久保貴美子さん。脱力系癒しキャラ「ししゃもねこ」で知られる、本町在住の造形作家さんです。■自分だけのオリジナルハンドメイドグッズが作れる体験型ワークショップも充実！お気に入りの一品が見つかるかも！皆様、ぜひご注目ください。

創世ホール名画鑑賞会 vol. 31

『モリのいる場所』

令和2年1月18日(土)

①午前10時30分 ②午後2時(2回上映)

会場：3階 多目的ホール

上映作品：「モリのいる場所」(2017年上映作品)

入場料：一般・大学生 前売1,000円 当日1,300円

小中高生・60歳以上 (前売・当日) 1,000円

主催：創世ホール名画鑑賞会実行委員会

(☎088-698-1100)

■毎回ご好評いただいております創世ホール名画鑑賞会、31回目となる今回は、日本映画界を代表する名優・山崎努と樹木希林の共演作「モリのいる場所」を上映します。■時流に無頓着で、庭に集い来るちいさな生き物たちを描き続ける画家・モリ(山崎努)と、彼を支え続ける妻・秀子(樹木希林)の、何でもない、けれどちょっとおかしな一日が始まる——■「画壇の仙人」と呼ばれた画家・熊谷守一のエピソードを元に紡がれる、心あたたまる夫婦愛の物語。ご期待下さい。

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

だれが明朝体を作ったのか

～その誕生と歴史④

書体設計家、活字書体史研究家★小宮山博史
講演探録★2019年3月16日★北島町立図書館・創世ホール3階多目的ホール

■これはロンドン・ミッションリー・ソサエティ（ロンドン伝道会）が作った非常に珍しい物です。自分の印刷所が印刷した聖書の類を1頁切り取って貼っていったものです。

■次をちょっと開けてみてください。ここにこの前お見せしたワツの活字を使った『使徒行伝』の1頁が貼ってあります。こういうのは、1頁切り取ると零葉（れいよう）——零に葉と書くんですけど、零葉を、こうやって自分たちのロンドン伝道会の印刷所が印刷した聖書群から1頁切り抜いて貼った。こういうものもあります。厚い本なんですけど、全部の頁に、印刷物を1頁ずつ貼るという手間のかかった非常に珍しい資料です。他の教団もこういうものを作っていたかどうかわかりません。

■ヨーロッパ大陸の中で、博愛主義運動に背中を押された宣教師たちは、どんどんどんどんインドだとか、膨大な人口を持つ中国へ渡っていきます。これはセランボワ——インドのカルカッタの北にあるところですけど——、そこにあるロンドン伝道会の印刷所が作った漢字活字。これは明朝体としてはなかなかよく出来たもので、特にこの下にある「之」は非常にきれいな形だと思います。で、ちょっと覚えておいて欲しいんですが、この「神」という字。これは24ポイントなんですが、イギリスからやってきたジョン・ローソンという職人がこれを彫った。今までできた明朝体の中で最も美しいという風に言われています。

■これはどうも鋳造活字です。活字の話をもう一度繰り返しますが、鋳造活字というのは、母型と言って凹型になった型に金属を流し込んで、同じ型の字をずっと作っていくやり方です。もう一つは彫刻活字と言って、一字一字、全部彫っていくというやり方。例えば「人」が10必要なら10個彫るので、全部形が違う。

■これは活字の内のある特定の文字、たとえばこれという「之」だと思ってしまうのですが、これは使用頻度が最も高い字ですから、これはたぶん種字っていうかな、元の型を彫って、それを金属に打ち込んで凹（へこ）んだところに活字材を流し込んで字を作っていくやり方で作られたと思います。殆どは、たぶん一字一字を彫刻したものだと思う。24ポイントでちょっと大きめで彫りやすい。でも非常にきれいです。これ以前の明朝体に比べれば、バランスはだいぶ良くなってきたと思います。

■はい、次。2種類の漢字活字が掲載されていますが、上の段はベングルの型染めの職人が作った字です。あまり大したことはない。下段は、イギリスから赴任したジョン・ローソンが彫ったもの。「神」をちょっと拡大してください。大きいやつも同じだったんですが、「示」の左側の線をずーっと長くしてある。前の24ポイントのものと同じですね。同じデザイン様式ですので、たぶん同じ人が彫ったということが言えるでしょう。ちょっと画面を上げてください。

「創」という字。この横線が1本欠けています。多分書くのを忘れたんだと思います。こういうのがインドでもって作られている。これはもう確実に布教用の書体になります。

■はい次。辞書です。今の24ポイントの字を使って印刷したものです。こうやって辞書をどんどん作ってゆく。宣教師たちはまず最初に現地語を学んだ成果を辞書にします。で、そうして翻訳して布教用聖書を作ってゆく。なかなかきれいなものです。宣教師は真面目で勉強家です。見てお分かりのとおり、ラテン・アルファベットは小さく、漢字活字は大きい。なかなか小さくすることは難しいので、こうなるんだろうと思うんですけど。

■次、行ってみてください。ここに来るとだんだん（日本に）近づいてくる。マカオで作られた本ですね。ロバート・モリソンっていうイギリスの宣教師ですけど、こんな風に色々な漢字活字を作った。ロバート・モリソンも中国語辞書——チャイニーズ・ディクショナリーを作った。6巻本です。イギリスの東インド会社が金を出して、印刷していきます。6巻本で650セットを作って販売しています。日本にはこの本のセットは10セットぐらいだろうと思いますがいくつかの図書館が収蔵しています。なかなか手に入りにくい辞書であると思います。世界最初の本格的な中英辞典です。

■マカオまでやっとなんてやってきました。ここにはドイツの特徴のある髭文字で、マートン・ハウス・ライブラリーって書いてある。マートン・ハウスというのはイギリスのオックスフォード大学の一つのコレジで、その図書館から盗まれたものか、あるいはマートン・ハウスが売ったのか、それもよくわかりませんが、いずれにしても珍しいロバート・モリソンの辞書。これはパート1（PART 1）です。VOL. 1 part 1で、一番最初に作られたもの。3部作、3部門のもんですけど、漢字活字は全部が彫刻活字。つまり1字ずつ全部彫った。この活字は、のちに中国内で、色々な書籍や雑誌に使われるようになりましたが、最後は火災によって破壊されてしまいます。縦長の形で、これは本当によく使われていますね。

■（次の図版）これも辞書。チャイニーズ・ディクショナリー（中国語辞典）の第1頁。マカオで印刷しているんですけど、この辞典には異版がたくさんある。異版というのは、同じパート1ならパート1であっても、本によって活字の組み方が違ってくる。活字が違っている。

■その頃の清朝というのはキリスト教を禁教にしています。で、例えば中国人でキリスト教だったら、捕まえて殺しちゃうとか、そういう凄いきついことをしてしまっていたので、活字を持って逃げたりしていたのかも知れません。いろんなところを転々として印刷したのでしょう。この辞書を研究している人は、ずいぶん違った版が出ていると言ってます。

■ちょっと漢字を拡大してみてください。これは赤ペンでもって、丸印で囲んであるんですけど、フランスの言語学者の自筆で、扉にその名前が書いてある。ずいぶん一生懸命勉強したようです。その人が勉強のために持っていた辞書が、イギリスに渡り収蔵されたのではないかと考えています。使われている活字はこんな字です。ちょっと縦長の。そんなに良い書体かと言われると、たいしたことはありません。

■『五車韻符 [ごしゃいんぷ]』。案外有名な本です。これは、マカオ

でモリソンから日本人に『五車韻符』の巻を寄贈したという記録があります。6巻本と言いますが、この『五車韻符』の巻がずいぶん流通したようです。

■次、開けてみてください。漢字がずーっと並んでいます。モリソンという人は、何人かの中国人の助手を使ってこの辞書を作ったと言われています。ただし、さっきも言いましたようにキリスト教が禁教とされていた時代でしたから、なかなか大変でした。でも、マカオなら何とか大丈夫だったのでしょうか。

■では次に行ってみますかね。今、モリソンの辞書が出てきましたけれども、このころキリスト教が禁教であったということと、それからアヘン、中国に対して、アヘン貿易がさかんになってイギリスの東インド会社なんかもやっているかもしれないし、まだ日本に会社がありますけど、ジャーデン・マセソン商会っていう、少し前まで横浜にありましたけど、今東京に移っている貿易商社です。ここもアヘンを売っている。清朝はアヘンを禁止する布告を出しますが、アヘンの吸引者や貿易会社はなかなか言うことを聞かない。そこでアヘン禁止の強硬派の林則徐という人を大臣にして広東に送り込むということになります。林則徐はアヘンを没収して海に捨てますけれど、それに対してイギリスが怒って戦争を仕掛けてくる。《アヘン戦争》です。

■1840年にアヘン戦争を起こします。でも圧倒的な火力の前に清朝は敗退を繰り返します。ここで火薬が出てきます。3大発明の最後の一つ。最終的には火薬でもって制圧していく。そのために清朝は、莫大な賠償金を払い、香港を割譲し、上海を含む5つの港を貿易港として開いた。普通で考えるとこれは正論が暴論に負けた戦争ですね。これ以降、100年にわたって中国は苦難の道を歩むこととなります。それがモリソンの辞書の背景にある歴史です。

■ここからウィーンに話が飛びます。今まで漢字活字だけでしたけど、ここからは仮名と漢字の日本語の活字が出てきます。これは凄いですよ。この本はウィーンで刊行された『浮世型六枚屏風』という柳亭種彦が著した絵草子です。これは心中物ですけど、心中物で有名な近松門左衛門の話は、最後は必ず死ぬんですけど、種彦のものは最後は二人が幸せになるという明るいものです。

■ちょっと全体を見せてください。はい、このように絵の周りに文字が入っている。これは全部活字です。制作年代は1847年かな。（以下、次号に続く★探録・文責＝小西昌幸）

小宮山博史さん略歴●こみやま・ひろし●1943年2月24日生まれ。國學院大學文学部卒●書体設計家、活字書体史研究家●大学卒業後、佐藤タイボグラフィ研究所に入所。佐藤敬之輔の助手として書体史、書体デザインの基礎を学ぶ。佐藤没後、同研究所を引き継ぎ書体設計・活字書体史研究・レタリングデザイン教育を三つの柱として活躍●書体設計ではリョービ印刷機販売の専売書体、文字フォント開発・普及センターの《平成明朝体》、中華民国国立自然科学博物館中国科学庁の《表示用特太平体明朝体》、大日本スクリーン製造（現・株式会社SCREENグラフィックソリューションズ）の《日本の活字書体名作精選》、韓国のサムスン電子フォントプロジェクトなどがある●武蔵野美術大学、桑沢デザイン研究所で教鞭をとり、現在は阿佐ヶ谷美術専門学校非常勤講師●阿佐ヶ谷美術専門学校では昨年秋から、字游工房の鳥海修氏と対話形式3時間の特別講義「明朝体の教室」を隔月で開催、大きな注目を集めている●印刷史研究会代表。佐藤タイボグラフィ研究所代表●編著書に『本と活字の歴史事典』（柏書房）、『活字印刷の文化史』（勉誠出版）、『明朝体活字字形一覽』（文化庁、大蔵省印刷局）、『日本語活字ものがたり—草創期の人と書体』（誠文堂新光社）、『タイボグラフィの基礎』（同）、『文字をつくる～9人の書体デザイナー』（同、雪朱里著）など多数●神奈川県横浜市在住